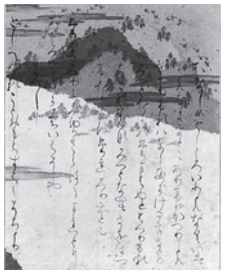
美術の窓(80)

平成13年度の展観活動を振り返って

—大和文華館の展示空間—

大和文華館館長　水田　徹

石山切　個人蔵



石山切　大和文華館

梅の満開を間近に今年も年次評価を行う季節となりました。お陰様で入館者数は今年度もすでに3万人を越え、昨年末に設定した改善目標に対し皆様から一定の評価を頂いた結果と喜んでおります。

平成13年度最初に開催した「絵画名品展」は、日頃人気をいただいている作品を年に一度、定例的に展示するという趣旨にご賛同いただけたのでしょう、一日平均二百人近くの皆様をお迎えすることができました。屏風絵を中心に、と焦点を絞ったのも功を奏したと考え、平成14年度は「人と風景」と副題をつけることにいたしました。漠とした題ではありますが日本絵画の魅力が改めて浮き彫りになればと念じております。

意外に、と申すのも恐縮ですが、第2回展の「花の美術」も好評でした。今では大変貴重となった自生のササユリの開花時期に合わせて、本館周辺に広がる「文華苑」で自然をお楽しみ頂いたあと、花にまつわる美術品をじっくり味わって頂こうという趣向でした。

その際にとりわけ威力を発揮したと思われるのが大和文華館の建築形式です。ご案内のように本館入り口のロビーは展示室の面積に比し一見冗長すぎるほど奥行きをとってあります。池を間近に望む傾斜地という敷地の形態、長椅子を作り付けて休憩室を兼ねるという使用目的などをクリアする必要があったのでしょう。しかし同時に、ロビー左右の長い壁面を、入り口近くは無地の白壁に、その先を天井まで届く特大の障子に仕立てたのには特別のねらいがあったに違いありません。自然を堪能されたお客様を今度は芸術へと誘う架け橋とするべく奥行きを十分にとり、加えて、両サイドを無地の白にすることによって、いまご覧いただいた外の自然をいったん切り離し、これからお入りいただく芸術の世界へお客様の目を誘い、気持ちを整えていただくこと、これがロビーの設計理念であったと思われるのです。正面入口奥に広がる白壁が醸す緊張感を、今年もぜひお楽しみ下さい。なおこの「花の美術」展では昨年と同じ小・中学生用のワーク・シートをご用意いたします。

秋の特別展「国宝寝覚物語絵巻」もお陰様で大好評でした。所蔵家のご理解とご厚意を得て、20点以上の国宝を展示することが出来ました。そして、その多くがとりわけ自然光に敏感な絵画、書蹟、染織工芸品でありましたので、文化財保護という観点から大和文華館としては初めて、展示場から外光を完全にシャットアウトいたしました。蛙股池を望むテラスはシャッターで閉じ、ご愛顧いただいている竹の中庭もブラインドを降ろしたままとし、会場入り口には別途遮光カーテンを雁行型に吊るしました。そのカーテンの色が工事現場の目隠し幕に近かったため、今日は休館日かと思ったとか、竹庭を楽しみに来たのに、といったご不満も多少は伺いましたが、事情はご賢察いただけました。

この会場設営法には思いがけずご好評いただいた点もありました。前述のように会場のあちこちにカーテンを張り巡らしたため、布地のもつ消音効果が発揮され、加えてルクスを少しでも落とすべく天井の飾り電灯もすべて消したため、静かに、唯一光のあたる展示作品に、神経を集中することが出来た、というわけです。絵巻物にしても墨書切類にしても、ほとんどの出陳品が天地20センチ前後という法量でしたので、作品に集中していただくには確かに格好の展示法だったと申せましょう。

ではしかし、日頃の大和文華館は騒々しく、中庭の竹は鑑賞を妨げているのでしょうか。いささか強弁かも知れませんが、美術品を見ながら会話を交わすこと自体、私は決して悪いこととは思いません。問題はその会話の中身です。仮にそれが作品とは無関係な雑談であれば他のお客様の迷惑となりましょう。しかし会話を雑談化するか否かは、決してカーテンの消音効果云々ではなく、展示品あるいはその扱い方、つまり展示企画そのものの質の高低に由来すると言うべきでしょう。館員一同そのことに改めて心を留め、来年度の展観に取り組む所存です。

では中庭はどうか。仮にそこに紅白梅が咲いていれば、恐らく鑑賞の妨げになりましょう。しかしご案内のように植え込まれているのは孟宗竹であり、色は季節を問わず落ち着いた緑であり、形は竹の幹の垂直線一種に限られています。美術作品がみせる変幻自在な色と形から一瞬目を離し目を休め、あるいは自らの脳裏におもいを巡らすには、あの中庭から洩れる光と竹の葉のささめきは、効果こそあれ邪魔になるとは思われません。むしろ大ガラスには紫外線防護フィルターを張り、さらに季節と時間帯に応じてこまめにブラインドを下ろすなど、これまでの努力は怠らず、しかし、自然の中で自然と対峙しつつ作品を鑑賞いただくという大和文華館の展示法の基本は、今後とも堅持してゆきたいと考えております。

肝心の特別展の中身に評価を下す紙面がなくなりました。気鋭の学芸員がよくぞここまで頑張ってくれた、というのが総評です。国文学界の皆様が多数お見え下さったのも、大和文華館の今後の進路に一つの大きな示唆を与えてくれるものでした。

現在は分蔵されている「石山切伊勢集」二葉が本来の対頁の順に、そして佐竹本と上畳本の二軸の「小大君像」がそれぞれ並べて展示されていたのも圧巻でした。特に前者は30年前に留学先のウイーン大学で聴いたオットー・ペヒトの名講義をまざまざと思い出させてくれました。神がモーゼに戒律を授ける場面を描いた「アドモントの大型聖書」の対頁を例に、美術品を見る際の「構え」を説いたものです。詳しくは折を見て改めてご紹介いたします。14年度もよろしくご愛顧、ご鞭撻賜りますよう。　（平成14年2月20日記）

季刊 美のたより №138
平成14年4月5日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.